

あなたの音感は何型か？

——絶対音感の誤解——

ド レ ミ ド レ ミ ソ ミ レ ド レ ミ レ ?
ファ ソ ラ ファ ソ ラ ド ラ ソ ファ ソ ラ ソ

たくきよしみつ

■はじめに

第一章 絶対音感の誤解 5

- 遠い「拒絶」の記憶
- 間違いだらけの「絶対音感」
- 人間音叉能力とドレミ音感は無関係
- 基準点が変われば「絶対音感」の定義も変わる？
- 「絶対音感」の持ち主は古楽器の演奏ができない？
- 高級カセットデッキでも保証できない「元の音」
- 正しく調律されたピアノは狂っている？
- ピタゴラスコンマのジレンマ

第二章 「絶対音感」とは何か？ 18

- 絶対音感と相対音感
- 人間音叉的音感と音楽的才能はまったく別
- 絶対音感とコンピュータ
- メロディは相対音感の産物
- 小林亜星VS服部克久盗作訴訟に思う

第三章 移動ドと固定ドの抗争 26

- 移動ドと固定ド
- クラリネットの『アマリリス』
- 鈴木メソッドと移動ド
- バイエル32番に潜む怪物
- 固定ド vs 移動ドの仁義なき戦い
- 「固定ド」の罪
- 音名で歌うのは無理
- 階名と音名をごちゃ混ぜにする愚
- 『グリーンズリーブズ』の迷宮
- 12音全部に名前をつければ解決するという問題でもない

第四章 「音楽的」音感とは？ 40

- 二つの絶対音感、二つの相対音感
- 「実音固定ド」と「譜面固定ド」
- ミシラソと鳴ってもラミレドと聞こえる移動ド音感
- 移動ド音感とは鼻歌作曲派の音感
- ウグイスはドレミを知らないのに歌っている
- 再生能力と創造力
- ドレミ音感が日本人の音感を殺す？

第五章 あなたの音感は何型か？

……………50

●天才作曲家は固定ドだった！

●ドレミで歌えないメロディがかっこいい

●長調・短調以外の音階でも相対音感はつくのか？

●相対音感「モード型」人間の存在

●ドレミファは長調・短調だけでいい？

●あなたの音感は何型か？

●自分の「音感型」を知れば音楽の世界が広がる

第六章 デジタル時代の音楽教育

……………61

●音楽の危機

●居間に生ピアノの愚

●バイエルをやらせる教師は疑ってかかれ

●最初はシンプルなデジタルピアノを買う

●なにか一つは生の楽器を

●幼児期の「音感教育」は必要か？

●大人になってからでも諦めることはない

●大切なのは「よい音楽」を聴かせること

■あとながき

……………71

ドレミ ファソラ ドレミ ファソラ ソミレ ドレミレ ソミレ ドレミレ ソミレ ?

★実際に、<http://takuki.com/onkan/> で音としてご確認ください。

- ファソラ ファソラ ドラソファソラソ……と聞こえる。 ————— 絶対音感固定ド型
- ドレミ ドレミ ソミレドレミレ……と聞こえる。 ————— 相対音感移動ド型
- ドレミでは聞こえないが、この程度のメロディであればすぐ楽器で弾ける。 — 相対音感ノンラベリング型
- ドレミよりもピアノの調律が気になる。A = 440Hz から外れている楽器は気持ちが悪い。 ————— 人間音叉型
- ドレミでは聞こえてこない。 ————— 一般型

■はじめに

ここに「絶対音感」を持っていると自称する3人の男女に集まってもらいました。

3人の前で、誰もが知っている唱歌『チューリップ』（「さいたさいた……」）のメロディを、ピアノでへ長調（Fメジャー）で弾いてみます（本書扉・目次ページの譜面参照）。

「これをドレミで歌ってみて」と言われた3人の男女は、それぞれ次のように答えました。

◆A君

「簡単さ、ドレミ ドレミ ソミレドレミレ……だね」

◆Bさん

「違うわ。ファソラ ファソラ ドラソファソラソ……だわ」

◆Cさん

「これをドレミで歌えですって？ 無理よ。調律が狂っているもの。このピアノ、Aが450ヘルツ近くあるわ。ピッチが高すぎる。気持ち悪くて聴いてられないわ」

さて、この3人誰が本当の「絶対音感」の持ち主なのでしょう。うか。

また、絶対音感がどういうものであったとしても、その定義には関係なく、この3人のうちで誰がいちばん「音楽的」な耳

を持っているといえるでしょうか。

さらには、世の中の大多数の人たちは、この3人のうちのどのタイプにも属さない人たち、つまりはメロディを聴いても、それを瞬時にはドレミで言えない人たちです。こうした人たちは、この3人に比べて音楽的素養が劣っているのでしょうか。

本書の第一の目的は、ちまたに溢れる「絶対音感」にまつわるさまざまな誤解、偏見、妄想、神話を検証した上で、訂正することです。

第二の目的は、私たちが身につけている「音感」にはさまざまなタイプ（音感型）があり、その「音感型」を知ること、今からでも遅くない、もっとも適した「豊かな音楽生活への耳作り」の方法を探っていくことです。

そして第三の目的は、これから音楽的な耳を養っていく小さな子供たちが、教条主義や権威主義、固定概念の犠牲者にならず、豊かで幸せな音楽教育を受けられるようにとの祈りを込めて、子供を持つ親たちに、デジタル時代に適した音楽教育を考えていただくことです。

ではさっそく、「音感」というキーワードを出発点にして、音楽という不思議な宇宙を解明する旅にでかけましょう。

★この実験は、実際に <http://takuki.com/onkan/> で「音として」ご確認いただけます。

第一章 絶対音感の誤解

——絶対音感は存在する

しかし、それは同時に「妄想」でもある

●遠い「拒絶」の記憶

「絶対音感」……それは、私にとってはとても古い記憶に属する言葉です。

物心つく頃から、私は母からこの「絶対音感」という言葉を何度も聞かされてきました。なぜなら、母はこの言葉の持つ魔力に取り憑かれ、最初の子であった私に、なにがなんでも「絶対音感」を身につかせようとしたからです。

当時、福島市で中学校の養護教師をしていた母は、私を産んでもまもなく、同僚の音楽教師から「絶対音感」についての話を聞かされたそうです。

「音楽を楽しむには音感というものが大切なんです、それは

ごく小さいときにしか身につけられないですよ。いわゆる『絶対音感』は、2、3歳児のときに訓練すれば10人中9人くらいは身につくけれど、これが10歳になってからでは、10人中1人身につくかどうかなんです。だから、音感教育を受けさせるなら、早いほうがいい」

この話に大いに感化された母は、私が2歳10か月になったときに、カナダ人の音楽教師のもとに通わせ、ピアノによる音感教育を受けさせ始めました。

そのカナダ人教師はごく普通のピアノ教師で、特に音感教育のプロだったわけではありません。そこで母は、自分が読んだ音感教育に関する本をそのピアノ教師にも買い与え、こんな風に教えてほしいと要請したそうです。

本の著者のことは忘れてしまいましたが、確かだったことは「色音符」を使っていたことだとのこと。

ドは赤、レは黄色、ミは緑、ファは橙、ソは空色、ラは紫シは白。

鍵盤に色紙を貼り付けて練習させたそうです。

……こう書いていくと、なにかとつもない上流家庭に育つたように誤解されそうですが、そんなことはありません。

私が生まれた家は貧しく、トイレもない長屋でした。雪が降る中、震えながら用を足しに戸外の共同便所へ出ていった記憶があります。

もちろんピアノなどあるはずもなく、母は、私の音感教育のために、どこからか中古の足踏み式オルガンを買ってきました。当時（昭和30年代前半）、電気式のオルガンはまだ始めたばかりで、わが家の経済力ではとても手に入りませんでした。

しかし、3歳にもならない幼児が、足踏み式オルガンを弾けるはずがありません。送風ペダルを踏みつけるだけで重労働です。椅子に座れば足がペダルに届きませんから、仕方なく、立つて、力一杯ペダルを踏みながら弾こうとします。しかし、ペダルを踏むだけで精一杯なので、とても鍵盤にまで注意が向きません。手もまともに届きません。

母が横に立って踏んでくれれば弾けますが、学校で一日働いて帰ってくる母も、そこまでは体力・気力がもちません。

幼い私にとつて、足踏み式オルガンは、時に、悪魔のように思えたものです。

それでも音感教育による効果はめざましかったようです。

散歩に行き、近くの幼稚園の庭で先生が園児たちにオルガンを弾いて聞かせている場面に遭遇すると、家に戻るなり、私は足踏みオルガンでそのメロディを弾いてみせたそうです。

しかし、順調に見えた音感教育は、1年後、突然、私の猛烈な反逆で幕を閉じてしまいました。

母の話では、ピアノ教師のところへ連れていこうとしても家の玄関の柱にしがみついて離れようとせず、引き剥がすように

して強引に連れていっても、今度はピアノの蓋にしがみつки、絶対に開かせまいとしながら泣き叫んだそうです。

カナダ人女性から音感教育を受けたときの記憶はほとんどないのですが、やめるときのその強烈な拒否反応のことは今でもぼんやりと覚えています。

なぜそんなことになったのでしょうか？

立ち上がった後も鍵盤のようにやく手が届くかどうかという幼児が、足踏みオルガンの演奏を強いられる肉体的苦痛から？

もちろん、そうした理由もあったかもしれませんが、私には、また別の理由があったような気がします。というのは、あのときの強烈な拒否反応には、「理不尽なものを押つけられた不快感」に似た記憶が混じっているからです。

ピアノを習い始めて1年が過ぎた頃、それまでハ長調ばかりだった練習曲や課題に加えて、ハ長調やト長調、二長調、といった、スケールの中に黒鍵をまじえた調の曲を提示されるようになりました。そして、これは後になってから思い当たったのですが、私の最初の音楽教師であったカナダ人女性は、ある日之境にして、突然「固定ド」でメロディを歌い始めたような気がします。

私の強い拒否反応は、足踏み式オルガンの肉体的苦痛よりも、先生が固定ドを押つけてきたことによる「裏切られ感」だったのではないかと思うのです。

幼児期の記憶なので、はっきりしたことは分かりません。ただ、確かなことは、1年でやめてしまったとはいえ、この後、母は誇らしげに何度も私にこう言い聞かせたことです。

「ピアノはやめてしまったけれど、絶対音感をついたのよ」

しかし、これは間違っていました。私についたのは「絶対音感」ではなく「相対音感」だったのです。

●間違いだらけの「絶対音感」

母親が得意げに言っていた「絶対音感」とは何でしょう。

1998年、最相葉月氏が『絶対音感』という本を出版しベストセラーになりました。恐らくそれまで、この「絶対音感」という言葉は、音楽教育界ではたびたび語られるものの、一般に浸透することはほとんどなかったと思います。

その意味ではちよつとした事件でした。

最相氏の著作『絶対音感』は、精力的な取材に裏打ちされた力作ではありますが、彼女自身、音感というものを根本的に理解していないまま書いたため、本の内容には多くの無理解や誤解が見られました。

その結果、「鳥のさえずりも救急車のサイレンもドレミで聴こえる」などという、一種誇張した惹句も手伝って、多くの人をはかえって「絶対音感」というものを正しく理解できなくなっ

てしまいました。

自然界の音がドレミに聞こえることがあるというのは、そういう訓練を受けた者にとつては普通のことなのですが、その他大勢の人たちにとつては、一種の「超能力」のように思えるでしょう。この本を、オカルト本(?)のような感覚で手にした人も少なくなかったようです。

最相氏が理解できていなかったのは、メロディと音の周波数の関係性です。

例えば、鳥の鳴き声がメロディになることはありません。

私が最初に作った音楽アルバム『狸と五線譜』の1曲目に収めた『ウグイスの主張』という曲は、ウグイスの鳴き声から始まります。ホーホケキョという鳴き声に続いて、ケキョケキョケキョ……という警戒音が長く続くのですが、それにシンセサイザーが変ホ長調のスケールで「ミドレ ミドレ ミドレ ……」とピツタリ被さつていき、やがて音楽が始まる……という趣向です。

あまりに見事に重なるので、この曲の冒頭を聴いた人は、鳥のさえずりがメロディになっていることがあるという事実を知るでしょう。

しかし、実際には、鳥の鳴き声が正確な音名を伴ってメロディのなることは極めて稀です。ウグイスやカクコーはかなり純音に近い音色の声で一音一音はつきりと鳴くのでメロディにな

りえますが、多くの鳥はもつと複雑で無秩序な周波数の声をしており、鳴き方もメロディには結びつきません。

では、人工的に作られた機械音はどうでしょう。

電話機のダイヤルプッシュ音などは、二つ以上の周波数を合わせた音なので、完全に一つの音名に聞こえることはありません。

救急車のサイレンは、ほぼ長3度の開きで二つの高さの音が交互に繰り返されているので、音程を言い当てることはできるかもしれませんが。しかし、たとえあらゆる救急車のサイレンが厳密に同一の音程にセットされていたとしても、それがどの音かというのはあまり意味がありません。ドップラー効果の好例にされることでも分かるように、救急車の走行速度や聴く人の位置によって音の高さは違うのですから。

そもそもメロディというのは、ある決められた音階の中の音が組み合わされて構成されています。

一方、自然界の音は、別に音階に従って発せられるわけではないですし、固有の周波数を持つ音よりも、無秩序な周波数の集合である音のほうが圧倒的に多いので、自然界の中で偶然発せられた音がメロディになっていることは滅多にありません。

というわけで、「鳥のさえずりも救急車のサイレンもドレミで聴こえる」などという煽りは極力排して、最初に、きちんとした「絶対音感」の定義を試みてみましょう。

●人間音叉能力Ⅱ絶対音感なのか？

ここで、本書の「はじめに」に登場するA君、Bさん、Cさんの3人を思い出ししてください。

簡単に振り返ってみます。

「絶対音感」を持っていると自負している3人に、へ長調で『チューリップ』（さいたさいた……）のメロディをピアノで弾いて聴かせ、「ドレミで歌ってみて」と要求したとき、3人は違った反応をしました。

◎A君

「ドレミ ドレミ ソミレドレミレ……」

◎Bさん

「ファソラ ファソラ ドラソファソラソ……」

◎Cさん

「ピアノの調律が狂っていてAが450ヘルツ近くあるから、気持ち悪くて歌えない」

この3人は全員、自分は「絶対音感」を持っていると思っています。それなのにこれだけ反応が違うのはなぜでしょう。

みなさんはお分かりになったでしょうか。

世の中で一般的に「絶対音感」と呼ばれている音感は、この例ではBさん、あるいはCさんの音感のことです。

彼らにとつてはA || 4 4 0 ヘルツ（前後）の音が「フ」であ

り、倍音の880ヘルツの音が1オクターブ上の「ラ」、半分の周波数の220ヘルツの音が1オクターブ下の「ラ」に聞こえます。

それを12等分した音の列（平均律）の音をすべて聞き分けられる能力のことを、一般的に「絶対音感」と呼んでいるのです。

ちなみに、YouTubeに「あなたは絶対音感を持っていますか？」などという煽りで、1000ヘルツと1010ヘルツの音を聴き分けられるかどうかという類のテストがいくつもあります。それは周波数の微妙な違いを感じることができる能力であって、絶対音感ではありません。

では、この3人の持つている音感を詳しく分析していきます。しよう。

へ長調で演奏された『チューリップ』がどう聞こえるかによって、音感の三つのタイプを紹介したわけですが、まず、3人のうちで、A君、Bさんの2人は、違う答え方ではあるものの、それぞれドレミを答えています。

問題はCさんです。

Cさんに言わせれば、このメロディを演奏したピアノは基準音のピッチが大きすぎていて、A（中央Cの上の「ラ」の音）が約450ヘルツくらいあるといいます。こんなに調律が狂ったピアノで演奏したのでは、ドレミをいうこと自体がナンセンスだと主張するCさんは、演奏される楽器が「正確な」調律

（チューニング）を施されていることが大前提だと主張します。Cさんの言うことが正しいなら、こんなにピッチの高い調律をされたピアノを平気で聴いている残りの2人は「音感がない」人たちなのでしょう。

●人間音叉能力とドレミ音感は無関係

Cさんは、『チューリップ』を演奏したピアノのピッチが高すぎると思いました。

測定してみると、確かにAが449ヘルツあります。

ただし、このピアノは全体に調律のピッチが高いのであって、音と音の間が狂っているわけではありません。1オクターブ上のAは正確に449ヘルツの倍の898ヘルツであり、オクターブ下のAは半分の224.5ヘルツでした。全体にピッチは高いものの、音と音の間隔は正確に12等分された平均律（これも後に詳述）になっています。

一般に、調律用の音叉の周波数はAが440ヘルツです。ただし、オーケストラなどは、多少高めに合わせたほうが美しく響くと言われ、442ヘルツあたりで合わせることが多いようです。

最相氏の『絶対音感』に、バイオリニスト五嶋みどり氏の「悲劇」が紹介されています。

A||440ヘルツの調律でしか音楽を聴かせず、完璧な「絶